

# 歴史的脈絡に因む平城宮跡の活用方法

内田 和伸（奈良文化財研究所）

## 1. はじめに

文化庁が令和元年度から行っているLiving History（生きた歴史体験プログラム）促進事業とは、「重要文化財や史跡を訪れた方が、往時のくらしや祭事などを体験し、日本の文化を理解・体感できるような、歴史的背景に基づいた復元行事や展示・体験事業などの取組」としている。この補助事業としての目的は文化財の付加価値を高め、観光資源として収益を増し、その収益で文化財の修理や整備に再投資を図る好循環を創出して、観光資源として更なる磨き上げを図るというものである。

ここでは少し立場を変えて、まず遺跡の正しい理解に資する、歴史的背景に基づいた復元行事や展示・体験事業の内容について考えることにする。具体的には筆者自身も発掘調査や整備事業、活用事業に関わってきた特別史跡平城宮跡を取り上げる。第二章では、平城宮跡での復元行事や展示・体験事業の基本構想での位置づけや関連する事業の経緯、行事再現の方法論、再現の実際、再現行事を含む催事全体の構成方法について述べる。第三章では、歴史的背景・史実・遺跡の性格にどのように因んだ行事ができるかについて、行ってきた事例と今後に展開の可能性のあるものについて述べる。第四章では、遺跡で新たに創造された催事を例にして、歴史的な事実等に如何に因むか、歴史的脈絡をどのように編集し、その脈絡を如何に現代に活かすか等について述べる。第五章では、弊所で行っている、歴史的背景や脈絡に因んだ他の展示・体験事業の取り組みに

ついて紹介したい。

歴史的脈絡に拘るのは、それを有することによりその遺跡で行われる復元行事や展示・体験事業などが取って付けたようなものではなく、その遺跡に相応しいものとなり、一層その遺跡が個性豊かで品格を有し魅力的なものになって、条件が揃えば結果として観光資源になり得ると考えるからである。

## 2. 平城宮跡における古代行事の再現

### （1）古代行事再現に関する研究と事業の経緯

「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」は文化庁によって昭和53年（1978）にまとめられ、平城宮跡整備の基本方針として次の3つが示されている。

- ①平城宮跡をはじめ同種の諸遺跡に関する調査、研究のための拠点的な場所とする。
- ②発掘調査や関連研究の成果にもとづき、遺跡の維持・整備、遺構の修復・建物等の復原等をおこなうとともに遺跡からの出土品等を公開展示する施設を設ける等広く国民各層を対象に、古代都城文化を体験的に理解できる場とする。
- ③上記①および②に関連し、遺跡の保存整備、遺構・遺物の保護・修復・復原等に関する技術開発とその実践的な応用および技術蓄積の場とする。

上記①での同種の諸遺跡とは古代の国衙や郡衙など官衙遺跡や城柵等と考えられ、それらを含めて平城宮跡を研究の拠点とするという。②の古代都城文化の体験的理解の場ともするためには、③の「遺跡の保存整備、遺構・遺物の保護・修復・復原等」の

「等」の中に文化財保護法の趣旨から当然「活用」が含まれると理解して、平城宮跡を遺跡の活用のための「技術開発とその実践的な応用および技術蓄積の場」とする必要があると理解できるのである。その活用のための計画技術に「歴史的脈絡の利用」が必要だと考えているのである。

平城宮跡の整備事業では発掘成果等の調査研究に基づき、遺構の平面表示や建物基壇の復元、建物そのものの復元等により空間構成の理解を促す屋外展示が進められてきた。しかし、そこで行われた古代の儀式や人々の営みに関する情報は現地の説明板等に若干記されたとしても、整備されたその場所を利用した演示等を通して遺跡の理解を深める普及啓発や情報発信はほとんど行われてはこなかった。

平成22年（2010）は平城遷都1300年に当たる年であるため、奈良県は平成14年（2002）に「平城遷都1300年記念2010年委員会」において「平城遷都1300年記念事業マスタープラン」（事業構想）を策定した。その事業群の中の「平城京歳時記」という小項目があり、その中で平城宮跡の復元整備された第一次大極殿院、朱雀門、東院庭園、宮内省などを舞台に、奈良時代の都の暮らしや年中行事等を歴史的な考証をもとに再現するとした。その具体的な例として、平城京の東市・西市の賑わいをはじめ、当時の人々の暮らしの様子や都を訪れた外国使節の様子、宮廷での年中行事（曲水宴、端午、七夕等）等をあげた。

これを受けて筆者は大極殿院南門前で行われていた儀式の再現を意図し、平成16年（2004）には「射礼とその復原に関する基礎的研究」を公表し、平成18年度から平成21年度には研究協力者と科学研究費の補助を得て、「大極殿院の思想と文化に関する研究」の中で、正月七日節会、釈奠、三月三日節会、五月五日節会（騎射）、七月七日節会、奈良時代衣装等に関する研究を進めた。その中でも射礼と騎射については史実の確認だけでなく、再現する行事とそれを含む催事全体の内容構成についても歴史的な脈絡から言及した。

平成22年には奈良県が中心となって設立した平城遷都1300年事業協会による平城遷都1300年記念事業の中で各種プログラムが実施され、古代行事の再現も行われた。詳細は本書立石氏報告を参照されたい。その後は平城京天平祭実行委員会・奈良県・奈良市が主催する平城京天平祭が毎年春夏秋に実施されている。

特別史跡平城宮跡は奈良県が管理団体であり、文化庁の下で奈良国立文化財研究所が昭和45年度（1970）から平成12年度（2000）まで一括して発掘調査・研究、整備、維持管理を担当してきたが、独立行政法人化に伴い、整備事業等は文化庁の直営となった。平成20年（2008）には平城宮跡の国営公園化が決定し、平成30年にその中枢部が国営公園として共用され、現在は公園財団が管理を委託されている。一方、平城宮跡の東部や西部は文化庁の管理下にあり、西部には奈良文化財研究所の敷地も含まれている。このように平城宮跡は文化庁、奈良県、国土交通省、公園財団、奈良文化財研究所が複雑に管理している状況である。

平城宮跡の活用では奈良文化財研究所が平成25年～30年（2013～2018）に特別名勝平城宮東院庭園の活用イベント、「東院庭園庭の宴」を開催した。復元された東院庭園を舞台に、観月を意識した夜間のイベントであった。詳細は既に報告しているので省略したい<sup>1)</sup>。その後一年間検討を行い、奈良文化財研究所が担う平城宮跡の活用の範囲は観光・公園利用ではなく、遺跡博物館としての教育・普及であるとし、「平城宮跡の活用に関する実践的研究」という位置づけで新たな段階に入った。活動の柱を、①復元建物のある空間における歴史的文脈に基づく体験の提供、②遺跡現地と、遺物・情報の関係性の再構築、③遺跡のある地域との関係性の再構築、とした。すなわち、復元建物の活用、遺構・遺物を活かした遺跡の活用、地域間交流である<sup>2)</sup>。

上述のような平城宮跡を巡る活用の動きの中で、個人的に意識してきたのは韓国文化財財団によるソウルの宮殿群の活用の在り方であった。朝鮮王朝時

代の王宮である景福宮では正門である光化門と正殿である勤政殿との間に建てられていた朝鮮総督府が1995年には撤去され、王宮の復元整備が進められていた。2002年のサッカーワールドカップを契機に、その空間を舞台にして王宮での儀式の再現事業が行われることとなり、守門将交代儀式が始まった。再現の経緯や儀式の内容、事業運営等について担当の安泰旭氏に平成18年（2006）にヒアリングをし、概要を報告した<sup>3)</sup>。その中では武官役が兵役を終えた若者の一時的な就職先になっている等しっかりとした運営の在り方が印象的であった。翌年には同氏らを招いて「宮中儀礼復興による文化遺産の活用に関する研究会」を開催し、平成20年には朝鮮王朝時代の儀式やその中で行われる宮中舞踊について報告してもらった<sup>4)</sup>。12年を経た令和2年、改めて同氏には現況と課題等を報告してもらったので詳細は本書安氏報告を参照されたい。

## （2）行事再現の方法論

伝統文化のプロデュースや伝統行事の再興等を手掛けている濱崎加奈子氏は、伝統行事再興の契機を、行事の由来から興す、建物の由来から興す、史料から興すとして三つの方法を紹介している<sup>5)</sup>。再興・再現する行事の選び方は事業主体と事業目的、対象地によって異なってくるであろう。整備の進んでいる平城宮跡で行事の再現をする場合は、復元された大極殿や朱雀門、東院庭園、推定宮内省といった場所が舞台として想定でき、再現する行事の概要を調べ、具体化しそうなら史料を博搜して検討を深めるという流れが考えられる。

射礼じらいを例にしよう<sup>6)</sup>。射礼は中国の儀礼に起源があり、弓を射ることを通して礼を体現する儀礼である。古くは『礼記』射義らいぎに記され、唐や新羅でも行われた。日本では七世紀半ばから始まり奈良時代を通して行われている。

まず行うことは、『続日本紀』での記載内容の確認で、行事の内容や場所、式日、参加者、特徴などが必要である。なお、『続日本紀』は編纂の方針から通常の年次行事については省略され、通常ではな

かった内容が記されていることが多い。八世紀の射礼の記事は14件であり、奈良時代の平城宮に限ればさらに記事は9件に限定されるのである。奈良時代の射礼は正月十七日前後に、天皇出御の大極殿院南門の前で全官人が的を射て、中れば禄が支給され、蕃客も参加することもあったというもので、確実に言えることは非常に少ない。

次に、遡る飛鳥・藤原宮期におけるその行事の内容の確認や、後の平安時代の内容の確認を通して、古代における変遷を明らかにしておく必要がある。中世以降も続く行事であればその内容の把握も必要となる。さらに、同時代の中国や朝鮮半島での同様の行事との比較をすれば古代日本の特徴が明確になる。

実際に射礼を復興しようとするれば、場所、式日、参加者等の他に、服装、道具、舗設、式次第等も必要になる。このため主に拠るのは九世紀の儀式書『内裏儀式』、『内裏式』、『儀式』等であるが、それらの記載から不足する内容は推測せざるを得ない。例えば的までの距離については、奈良時代の記載は見られないので、『内裏儀式』を参考に四十歩、約72mの距離の的を射たと考える。一方、的に中った場合の賜禄については藤原宮期での慶雲3年（706）正月17日条に詳細な記録があり、奈良時代も同様に2回射っていたこと等を想定することはできるだろう。

ただし、こうした復元的考察を加えて推測を代入しないと、行事としての内容を組むこともできないのである。

## （3）再現の実際

平城遷都千三百年祭での古代行事再現については立石堅志氏が報告<sup>7)</sup>している。射礼では本来的な事柄と実施した内容で異なった点としては次の点などがある。天皇役は不在であったこと。執行した場所は天皇が出御した第二次大極殿院南門跡の復元整備した基壇上としたこと。使用した弓矢については、本来なら丸木弓で征矢と呼ばれる長頸の鏃を装着した箭をもちいるべきところ、経費や安全面などから現在使用されている用具を用いたこと。本来なら全



官人が一人ずつ行い長時間を要するため、短時間に披露する必要があることから百々手式の次第を取り入れたこと等である。いずれも現実には演出上の効果や安全性、利便性等様々な条件があって、それに配慮せざるを得ず、本来的な再現は難しいことがあるのである。

#### (4) 催事全体の構成方法

射礼と騎射の古代行事の再現は、平成22年の平城遷都1300年祭やその後の平城京天平祭の中で実施されている(図1～2)。ここでは平成16年と平成18年に発表した射礼と騎射に関する研究の中から引用して、史実を踏まえた再現行事を含む催事全体の構成方法について、歴史的文脈編集作業の事例として報告する。ここでいう文脈編集というのは、歴史的事実や文化などに因んだ脈絡の延長上において、持続可能で、現代社会が受け入れやすく、新しい文化創造に繋がり得る内容の行事や催事を作り出すことである。

##### 1) 射礼

催事全体の構成については次のように考えた<sup>8)</sup>。

射礼の復興に向けて射礼の本来的な姿を復原考察してきた。朝庭儀礼全般にいえることかもしれないが、当時の射礼は天皇を中心とした律令国家において意味をなすものであった。従って、それをそのまま復興しても現代社会においては意義のあるものにはならない。現代社会に



図1 第一次大極殿院南門跡前で行われた射礼  
天平祭 平成25年11月2日

受け入れられる意義付けが必要になる。そのためには歴史的な事実を確認した上で、それを現代社会に活かし得るコンテキストを編集しなければならなくなる。

射礼は天皇が大極殿南門に出御し、天皇観覧のもとに官人が弓を射た儀式である。そこでは弓射を観るということ、全官人が射礼に参加したこと、蕃国からも射礼に参加があったという三つの歴史的な事実を確認した。この事実を現代に活かすためには次のように広い意味で三つの事実を捉え、現代の価値観において普遍的なものにする必要がある。すなわち、天皇の視点で射礼を観ることにより当時の朝庭儀礼を追体験すること。多くの人が参加する弓射であること。さらに、多様な弓射文化を持つ人の参加があるということである。それぞれに対応して、復興への三つのプログラムを提案しておきたい。

具体的には①儀式射礼、②偕楽射礼、③万国射礼と名付けて次のように提案した。

- ①儀式射礼とは、本来的な射礼を復元的な考証を経て、可能な限り当時の儀式を復興したものとし、現代の弓道の流派などの参加も得て、演武的に行うものである。
- ②偕楽射礼とは、全官人が参加したことに因む弓射で、市民参加型のものである。偕楽としたのは、平安時代になると射礼の後に直会が行われたこと、賭けを伴う賭弓という余興的な要素も加わった儀式もはじまったことをも加味したものである。市民参加といっても危険を伴うため、弓道部や市民サークルなどの経験者の演武である。
- ③万国射礼とは、多様な弓射文化を持つ人の参加があったことに因むもので、弓射文化の地域性(飲肥城下の<sup>しはんま</sup>弓道等)や国際性を展示・交流するものである。

提案は以上であったが、その後の平城遷都1300年祭では、平城宮跡第二次大極殿院南門の復元基壇の



南、即ち射礼の行われた本来的な場所で、本来的な距離72mの遠的が、第61回全日本弓道遠的選手権大会の開催により1200数十年ぶりに行われた。この時、ここが射礼の行われた本来的な場所であったとの歴史的背景を関係者が高円宮妃久子殿下にご説明されて御成りが実現したと聞く。歴史的脈絡に因んだ再現行事や催事ではその由来が現代と過去を結び付け、奈良時代を身近に感じさせるツールになると思われるのである。

第二次大極殿院南門前では遠的が恒例化することはなかったが、京都の三十三間堂前では江戸時代から通し矢が盛んで、毎年成人の日には新成人が競射を行っているように、令和4年に完成する第一次大極殿南門の前でもこうした行事を見てみたいものである。

## 2) 騎射<sup>9)</sup>

騎射は馬上から弓を射る行事で、後の武家による流鏑馬、笠懸、犬追物もその一つである。古代日本には中国や朝鮮半島から伝えられ、宮廷では五月五日の行事として取り入れられた。この日は七世紀には薬獵が行われていた日で、山野で女性は薬草を摘み、男性は薬効があるとされた若い鹿の角を採る狩をした。八世紀になると、天皇が重閣中門、重閣門、松林、北松林、南苑などに出御して、「走馬」「獵騎」「騎射」「校獵」を見たときと記される。全官人が参加したものと考えられ、儀式的構成は騎射・走馬・飾馬・



図2 中央区朝堂院で行われた騎射  
平成22年10月31日

田舞・宴・菖蒲薙の携帯からなる。平安時代には武徳殿が会場として固定され、儀式書『儀式』等を参照すればある程度次第を復元することができる。

行事全体の構成については次のように考えた。

- ①儀式射礼同様に、本来的な騎射を復元的な考証を経て、可能な限り当時の儀式を復興するものとし、現代の弓道の流派などの参加も得て、演武的に行うもの。(図2はイメージ)
- ②平安時代には近衛等の中から容貌端正な9人が選ばれて的を立てたことに因み、適者を選ぶイベント。
- ③神亀元年5月には「装飾に堪えられる者」が選ばれ「獵騎」に参加していることから、煌びやかな武具馬具を付けた参加者の写真撮影会。
- ④騎射以前は薬獵が行われていたことに因む、薬や薬園に関連した事項
- ④に関連して、具体的には次のように記したので少し長いがそのまま引用する。

五月五日節会のイベントを歴史や文化の文脈の中で捉え、関連する地域産業や史跡の活用も図ることがイベントの継続的な運営に必要なと思われる。

奈良の置き薬は、300年以上の歴史をもち、県内の生産額では富山に次いで全国2位になっている。しかし大手製薬会社の一般販売薬におされ、近年の生産量は伸び悩んでおり、薬事研究センターをもつ奈良県と、奈良県製薬協同組合、京都薬科大学の産官学が連携し、滋養強壮薬「天平宝漢」を開発した。歴史のある奈良県の製薬業界と、地域そのものの活性化に期待が寄せられるところである。イベントでの新薬販売などを通してこのような試みについての積極的なPRも必要であろう。

また、県内の宇陀市には国史跡に指定されている森野旧薬園があり、公開されている。将軍吉宗の時代に幕府採薬使による採取旅行が行われ、随行した森野藤助が後に幕府の小石川植物園から薬草6種類を拝領し、自宅背後の台地で

栽培を始めたのが森野薬園のはじまりである。国指定史跡の薬園には薩摩藩直営の植物園跡である佐多旧薬園（鹿児島県肝属郡大隅町）、旧島原藩薬園跡もあり、遺跡や史跡のネットワーク化により互いに一層の活用を図ることも可能であろう。

さらに、2006年10月20日付けで新聞各紙は県内高取町の羽内遺跡で大型建物跡が見つかり、推古天皇の薬獵の行宮と考える説を紹介した。こうした説が今後裏付けられれば、遺跡の価値は古代史におけるものだけでなく、薬の町として知られる高取町のまちづくりにとって一層重要なものとなるであろう。これは同時に、五月五日の儀式内容が変容した平城宮での騎射を理解するのにも有効であろう。

遺跡は歴史的時間の中にも、地理的空間の中にも脈絡をもって存在している。その脈絡が明らかになれば遺跡がより一層個性的なものとなり、その脈絡を現在の地域社会の中に位置づけることができれば遺跡を活かしたまちづくりができるものと思われる。そのための方法論の確立が必要である。

遺跡の理解のためだけなら儀式の再現だけで十分かもしれない。しかし、催事全体の中では上記のように、幅広い内容にした方が、事業の継続性の観点から望ましいと思われるのである。その時、儀式再現とは別の部分でも本来の性格に因んで、その性格から普遍的な要素を取り出し、その脈絡の延長上で現代社会の文化や観光、まちづくり等の中において意義のある内容に読み替える編集作業が必要になると思われるのである。

### 3. 遺跡の本来の性格に因んだ行事

#### (1) 出土遺物に因む

昭和40年（1965）の平城宮跡の発掘調査で但馬国養父郡小佐地域から赤米五斗を平城宮に納めたことを示す木簡（但馬国養父郡老左郷赤米五斗 村長語部広麻呂天平勝宝七歳五月）が出土した。これに因

んで地元兵庫県養父郡八鹿町小佐地区では昭和55年（1980）から赤米の栽培を始め、地元の小学校の児童が赤米を育て奈良の都に献上するという行事を平成2年（1990）から継続的に行ってきた。平成24年（2012）の小学校統合後は養父市立八鹿小学校が引き継ぎ、地元では田植え・稲刈り・感謝祭・わら細工づくりなど赤米づくりの体験活動が行われており、締めくくりに奈良の都に赤米を献上するというものである。

令和2年は10月30日に兵庫県養父市八鹿小学校の六年生児童が修学旅行の一環として自分たちで育てた赤米を奈良文化財研究所に持参してくれた。平城宮跡遺構展示館駐車場にバスで到着し、そこから俵を担いで復元建物群のある推定宮内省へ持ち込み、贈呈式を行ったのである。古代衣装を着た児童からは赤米1升と当時の出土木簡を大きく拡大したものが届けられ、役人に扮する研究員が検品の後、領収証にあたる木簡を手渡した（図3）。史実にはないが養父郡出身の采女と称した女性職員らがこっそり様子を見に来てたという想定で花を添えた。その後、馬場史料研究室長の講話の中で、当該木簡の出土地を確認し、庁舎で長さ約28cmの出土木簡を実見し、本物に目を輝かせていた。

遺跡の本来の性格にから出土遺物に因んだかつての生産地と消費地という関係性は平城宮跡との地域間交流として活用の展開にヒントを与えてくれたと実感した。各地の国府・郡衙や城柵の跡、国分寺



図3 推定宮内省復元建物での赤米献上隊



や国分尼寺の跡等で検出した遺構の復元や表示等の整備が行われているが、役所や寺院という遺跡本来の性格から多くは活用方法に窮しているところがあると思われるからである。こうした出土遺物に因む交流は消費地である武蔵国分寺跡（東京都国分寺市）の出土瓦に因んで、生産地である南比企窯跡群（埼玉県鳩山町）との間でも行われたことがある。詳細は本書手島氏報告を参照されたい。

## （２）人物に因む

現在、平城宮跡に関わる人々と奈良時代の地方の遺跡に関わる人々との交流は出土遺物に因むだけでなく、平城宮で活躍した人に因んで、その人を顕彰する出身地の地元団体との交流等も考えられよう。

例えば、平城宮東院地区は奈良時代末期には光仁天皇の楊梅宮となったことが知られている。その東院の東南隅では庭園遺構が発見されて、この時期の姿で復元整備され、特別名勝平城宮東院庭園となっている。また、東院の正門である南門も復元されているが、その北では発掘調査が進んでおり、楊梅宮の中核部が明らかになりつつある。この宮殿の造営責任者が高句麗王族と伝承される背奈福德の孫、高麗（高倉）福信である。彼は武蔵国高麗郡出身で、武蔵国司等を経て、宝亀４年（773）に造宮卿として楊梅宮を完成させた功績がある。出身地の武蔵国高麗郡は埼玉県日高市を中心とするあたりで、旧高句麗からの渡来系移民1799人を集めて、霊亀２年（716）に建郡されている。初代郡司は高麗若光で、若光を祀る高麗神社は地域の信仰を集め、現在も高麗氏が宮司を務めている。2016年には埼玉県の事業として高麗郡建郡1300年記念事業が行われ、各種催事が開催された。こうした盛り上がりを見せる地域との交流も考えられるであろう。

## ４．遺跡で新たに創造する催事

### （１）経緯

平成28年（2016）１月29日から２月２日まで平城宮跡第一次大極殿前庭を主会場にして新たな「奈良大立山まつり」が開催された。遺跡で新たな催事

が創造されたのである。奈良大立山まつりを例にして遺跡で新たに創造する催事の歴史的脈絡について考えてみたい。本章は開催直後に書き記したものに修正を加えたものである。

この催事は冬期の宿泊観光客の増加を図るため、奈良県が実行委員会を作って開催したものである。奈良県では初詣の時期が過ぎると観光客が減り、１月、２月の宿泊者数は８月の１／３まで落ち込み、３月になって東大寺の修二会（お水取り）が始まると増加する。そこで奈良県はこの時期に夜間のイベントを企画すれば宿泊者数が増加し、５日間で３万人の来場と約11億円の経済効果が期待できるとした。総事業費は約２億円で、そのうち四天王を象る大立山の制作費が約8,400万円という。閉幕後の奈良県の発表では来場者数は51,000人ということで目標を上回り、平成29年（2017）も継続するといった。文化財の学術的成果の普及だけでなく、地域振興でも文化財の活用が求められる昨今、平城宮跡でこのようなイベントが求められたのであろう。

ただ、このイベントについては、大きく二つの点で疑問の声があったと思う。一つは奈良県議会の予算委員会でも巨額の予算投入に疑問の声もあったように、費用対効果の問題である。もう一つは仏教的なモチーフを使うが、奈良と所縁の薄い「青森ねぶた祭」を思わせるイベントの内容に違和感があるということである。前者の問題についてはもとより専門外なので言及できない。一方、後者の内容については大極殿院の発掘調査と復元整備に関わってきた者として思うところがあったので、以下に記すことにした。

### （２）奈良大立山まつりの内容

奈良大立山まつりを詳しく紹介した奈良新聞（平成28年１月25日版特集）によると、奈良大立山まつりは観光振興のために新たに始めたイベントであるが、伝統行事を意識しているのである。すなわち、奈良県内各地では江戸時代からつくりものを身代わりとし降りかかる厄を落とす「立山」という風習があり、広陵町大垣内の「立山祭」（町指定無形民俗



文化財)、橿原市八木町の「愛宕祭」、御所市東名柄の「天満神社立山祭り」では無病息災を願って毎年執り行われている。こうした文化や行事を参考に無病息災の願いを継承する象徴的なまつりを新たに創造したのである。

実行委員会会長は次のように説明している。「大立山まつりでは、奈良を代表する守護神の一つである四天王にちなんだ巨大な「大立山」を4基製作し、灯りを入れた山車に仕立てます。そして、これらの山車を近隣の高校生をはじめとする地域の人たちが曳き、夜の平城宮跡大極殿院を練り歩きます。」

四天王は仏法を守護する神。仏教の宇宙観において世界の中央にそびえる須弥山の中腹にある四王天の主で、東方を守る持国天は国家の安寧を、南方を守る増長天は五穀豊穡を、西方を守る広目天は悪人を罰して仏心を起こさせる役割を、北方を守る多聞天は仏が説法する道場を静粛に保って、広く教えが聞かれるようにする役割をそれぞれ担う。イベントでは四天王に守られた空間で一年の無病息災と世界の平和を祈るという。この四天王は高野山金剛峯寺の四天王像を基に、彫刻家の藪内佐斗司東京芸術大学大学院教授が描いた四天王像を繊維強化プラスチックで制作し、縦横7mの台座に載せ、台座とともに内部から照明を当てるものである。

イベントは連日日没頃から始まった。前半は県内各自治体の伝統行事や祭等の出演があり、後半が大極殿前庭での大立山巡行である。その次第はおおよそ



図4 大立山まつり 平成28年2月1日

次のようである。

鐘の音が響きわたる中、無病息災・世界平和を祈るというまつりの趣旨に賛同する人の行灯(三千円)が奉納され、奉納者は舞台前方の観覧席に着く。来場者の無病息災と世界平和を願う口上があり、大極殿前の特設ステージで射手が凶の方角に向けて破魔矢を放ち、場を清める。大極殿前庭の四方に置かれた大立山を各団体が曳き、前庭を時計回りに二回巡行し、大極殿前で東西に4基が一行に整列する(図4)。この間、ステージでは和太鼓奏者らのパフォーマンスが大音量で繰り広げられる。最後に再び来場者の無病息災と世界平和を願う口上があつて幕を閉じる。

大極殿院の外では広陵町の立山の展示や各自治体の観光案内のブース、地元食材を用いた模擬店が軒を並べて、多数の来訪者が列をなした。

### (3) 大極殿院での仏教法会の歴史的文脈<sup>10)</sup>

古代の王宮は言うまでもなく、天皇の住まう宮室と国家の統治機構の置かれた場所である。大極殿はその中心建物であつて、即位式と元日朝賀、外国使節に関わる儀式など最も重要な国家的行事に利用された。大極殿の高御座に天皇が座し、前庭に臣下が整列して朝賀の儀式が行われている時、全国にある国府の儀場である国庁では、正殿を天皇のいる大極殿に見立てて整列して儀式を行い、天皇による全国支配が象徴的に可視化されたのである。

一方、王宮での国家的仏事は、孝徳天皇が長柄豊碕宮に遷る直前の白雉2年(651)12月30日、味経宮で二千百人余りの僧尼に一切経を読ませたことに始まり、飛鳥の諸宮や大津宮にも受け継がれる。藤原宮の時代は官大寺で行うようになり、あまり見られなくなるが、奈良時代、聖武天皇の時代になってからは平城宮での国家的仏事が再び盛んになる。すなわち天平9年(737)10月、疫病流行を鎮めるため第一次大極殿で初めて『金光明最勝王経』が講説されるという国家的仏事(大極殿法会)が行われてからである。『金光明最勝王経』は四天王をはじめとする諸天善神による鎮護国家の教説を含んだ經典

で、聖武天皇は天平13年（741）3月に国ごとに国分寺と国分尼寺を建立することを命じ、国分寺の塔には金字の『金光明最勝王経』を安置することも定めた。ちなみに奈良国立博物館所蔵の金泥の書はもとも備後国の国分寺に安置されていたといい、国宝に指定されている。

奈良時代も後半になると、天平神護3年（767）正月、第二次大極殿で『金光明最勝王経』が講説され、翌年からは恒例行事となって平安時代へ受け継がれ、「大極殿御齋会」「宮中最勝会」などと呼ばれるようになった。平安時代の儀式書によれば御齋会の本尊は盧舎那三尊の檀像で、高御座の上段に安置され、方形の下段には四天王、聖僧の座、『金光明最勝王経』を置く机が設置された<sup>11)</sup>。天皇の座は仏教を護持する統治者の立場を表すように高御座の北東に置かれ、この行事の時、大極殿は巨大な仏堂に変貌したのだった。天平9年の第一次大極殿の時も似たような状況であったのかもしれない。

国分寺建立の後は大極殿と諸国の国分寺が法会で連動した。吉川真司氏は、中世には東大寺が総国分寺と称されるが、古代東大寺が諸国の国分寺を総括・統合した形跡はないため、大極殿が諸国の国分寺と連動し、総国分寺と評価できるのではないかという。また、大極殿と国庁が連動した儀礼は世俗的な支配を表現し、大極殿と国分寺が連動した法会は仏国土の繁栄と安寧の祈願であった。すなわち、大極殿は聖俗両世界における全国統合装置であったと指摘している。こうした大極殿の仏教上の機能はあまり注目されることはなく、一般にも周知はされていない。

#### （4）遺跡活用の文脈

このような学術的状況と普及啓発の状況も踏まえて、新たなイベントの創造で違和感があるとされている点とそれに対する考えを整理しよう。

一点目は、地域で伝承されてきた立山という伝統行事を参考にしていることについてである。詳しく記された『毎日新聞』平成28年1月26日版を参考にする。一般の参加者が催事の内容を判断するのには、

新聞は適当な媒体と思われるためである。立山の風習は江戸時代から庶民が行ったものであった。このため、奈良時代、特にその王宮である平城宮跡で立山に因む祭りを行うことに抵抗感を示す人もいたようである。しかし、立山という地域の文化に目を向ける契機にもなり、非難すべき程のことではないのではなかろうか。

二点目は、大極殿で無病息災と世界平和を祈るということについてである。この趣旨は大極殿が諸国の国分寺と連動して国家の安寧を祈る場であったことが知られていれば肯定的な評価を得られたのではないだろうか。天平9年に付加された大極殿の機能を発展的に捉え、宗教色を抜きにした催事にしたことにより、現代社会において有意義な活用の文脈に読み替えたことになる。さらに発展的に考えれば、全国の国分寺跡・国分尼寺跡とネットワーク化して同時開催のイベントとすることも考えられたのかもしれない。

三点目は、なぜ四天王なのかということについてである。現地では特に詳しい説明はなかったので来訪者の多くは理解できなかったものと思われる。『金光明最勝王経』は『金光明経』を唐の義浄が訳したもので、この経典を読誦する国は四天王に守られて繁栄するとされており、四天王は御齋会で高御座の四方に並べられており、歴史的脈絡を有するのである。この時の催事は大極殿前庭での開催であり、大極殿内の展示に変更が加えられることはなかったが、御齋会の時、高御座を仏座としたことに歴史的意義を見出せるため、新たな行事では高御座に盧舎那仏形のものを入れて天平9年（737）の金光明最勝王経講説をイメージした、宗教色の無い再現行事を含む催事にすることも考え得る。このようにすると大極殿の機能に関する教育的効果は大きくなるのではないだろうか。

四点目は、なぜ太鼓を用いるのかについてである。和太鼓を主として行われたパフォーマンスには来訪者の多くが満足しているように見受けられ、筆者もその演奏には感動したであるが、歴史的脈絡はあっ

たのだろうか。主催者特にシナリオの作成者が太鼓の歴史的脈絡を意識していたかはわからないが、実は約1300年前の霊亀元年（715）正月元日は太鼓を利用することでの画期であった。この日は第一次大極殿の実質的な柿落としとなった朝賀の儀が行われた。新羅の使者や、東北の蝦夷、奄美などの島民も参加し、彼らを迎えるのに朱雀門の左右に鼓吹（太鼓や笛の楽隊）と騎兵を列にして並べせた。元日の儀式に鉦や太鼓を用いたのはこの時から始まったというのである。こじつけになるが、このような太鼓に因んだ史実を伝えた上でパフォーマンスをすればそれが一層味わい深いものになったのではないだろうか。

この催事は観光目的で新たに創造されたものであるから、多数の来客があれば目的は達せられることになる。しかしながら、その催事の行われた場所が特別史跡平城宮跡の第一次大極殿前庭であったため、その内容に多少なりとも違和感を持つ人がいたのである。そこで歴史的脈絡を調べてみると、上記のようにそれなりの脈絡が存在し、宗教色も抜いて地方公共団体が主催する催事では良く考えられたシナリオだったのではないかとというのが筆者の感想である。

では何が問題だったのか。以前筆者は平城宮跡で新たな催事を行う場合は古代の例に因むことを説明することが最も重要だと指摘したことがある<sup>12)</sup>。シナリオの作成者がその場所の歴史的文脈を理解し、それを現代社会において意味のある文脈へと編集し直して、歴史的な事象を発展的に活かした内容にすることはできていたが、それをわかりやすく説明することが不足していたのである。後述するインタープリターの不在である。このイベントを行った部署には担当する学芸員がいなかったと聞く。観光目的の新たな催事とは言え、平城宮跡という歴史的な空間で行うが故に確かな歴史的脈絡の延長上で催事が行われ、古代が彷彿される方が魅力的であろう。文化遺産を活かした観光やまちづくりの一部をなす、こうした催事にも研究者・学芸員がインタープリターとして関わるべきであると強く感じた次第である。

## 5. 遺跡の理解に有効な展示・体験事業

### （1）インタープリテーションとそのツール

「インタープリテーションinterpretation」という言葉は、一般的には「解説・翻訳・解釈」といった意味があり、知識の提供だけではなく、興味を掻き立て、深く理解を促すような教育プログラムであり、実践者がインタープリターである。こうしたプログラムの中、特に歴史展示に関わる内容では視覚的にあるいは味覚を駆使してでも理解を促すことも効果的だと思われる。特別に新しい手法ではないが、親しまれるためのマスコットキャラクターや当時の状況を分かりやすく伝えるための復元イラスト・復元フォトモンタージュ・AR表示、古代玩具を用いた遊戯の再生、歴食の再現を平城宮跡の活用に関する実践的研究の中でも行っており、そこでも歴史的な背景や歴史的脈絡を意識すべきものと考えている。

### （2）マスコットキャラクターの開発

2019年は皇太子殿下が新しく天皇陛下に即位され令和元年を迎えた。その秋には平城宮跡資料館で令和元年度秋期特別展「地下の正倉院展—年号と木簡—」が行われた。年号は前漢の武帝が初めて定めたもので、皇帝は地上を統治する空間だけでなく、時間をも支配するという観念があり、その皇帝の定めた年号を使用することは皇帝の支配に従うことを意味した。日本もその思想的影響を受け、大宝元年（701）からは元号を継続して使用し、現在に至っている。

漢代に流行した神秘思想である天人相関思想を背景に、奈良時代はめでたい亀や瑞雲など祥瑞の出現を喜んで改元し、平安時代になると疫病、兵乱、天変地異などの災害や異変、凶事によって改元する場合が多くなる。

元号や祥瑞は奈良時代の思想的背景や時代精神を象徴するものであり、平城宮の深い理解に繋がる契機になり得ると思われる。この展覧会ではその契機となることを期待して三つのキャラクターを当該年



号の説明パネル脇に登場させた。平城遷都1300年祭記念事業に関連して提案したことのあるマスコットキャラクターも含めて紹介しよう（図5）。

「霊亀くん」は霊亀改元の契機となった不思議な亀で、『続日本紀』霊亀元年（715）8月28日条には、左眼が白く、右眼が赤く、首に北極星近くの三つ星、甲羅には北斗七星が描かれ、両前脚に八卦の「離」の卦がある等の特徴が詳細に記されている。その出現を機に元明天皇は娘の氷高内親王に譲位し、彼女は第一次大極殿で即位、元正天皇となって大極殿の前庭で群臣にその亀を示して霊亀に改元したのである。この亀とよく似ているのが正倉院宝物で、裏北斗を背負う青斑石龜合子であり、亀は大地の象徴であるため天地の合一を意味した。「霊亀くん」は『万葉集』「藤原宮の役民の作る歌」に出てくる「図負へる くすしき亀」も意識し、その色彩は『千字文』の「天地玄黄」や『日本書紀』天智天皇9年6月の「上黄下玄」の不吉な亀の記載から背と腹は黒と黄が考えられたが、黒は色彩として重いため、甲羅は北極星近くの星座紫微宮に因んで紫色、胴体を黄色と脚色<sup>アレンジ</sup>して、平成20年（2008）にデザインしたものであった<sup>13)</sup>。この時点は、四肢には太極旗のように四卦が配されるべきとし、両前足に八卦の離の卦があることが不完全だと考えたが、離卦二つの組み合わせは六十四卦の離卦となり、聡明な中年女性、すなわち氷高内親王を意味していたことがわかり、今

回若干の修正を施したものである。

「慶雲さま」は藤原宮大極殿の西楼に慶雲が現れて慶雲に改元したことや、伊勢神宮外宮の上に五色の瑞雲が現れて神護景雲に改元したことから出雲大社本殿天井の「八雲之図」を参考にデザインしたものである。

「宝字ちゃん」は孝謙天皇の寝殿の天井に「天下太平」の文字が表れたことや蚕の卵がめでたい内容の文章を表したことを契機に天平宝字に改元したことからデザインしたものである。

こうしたマスコットキャラクターはその出現に関わる建物跡等を介して、背景にある思想に触れ、遺跡そのものの深い理解にも繋がる。特に「霊亀くん」の場合は、復元が進む第一次大極殿院という場所や参考にした正倉院宝物という物、『日本書紀』『続日本紀』『万葉集』等の文献をその誕生の脈絡でネットワーク化して活用を図れる可能性も有していると思われるのである。

### （3）復元・再現の画像・映像

上記の祥瑞はいずれも政治的捏造の疑いが強いのであるが、現在も稀に出現する祥瑞「一茎二花」の双頭蓮もある。光仁天皇の宝亀8年（777）6月18日、楊梅宮南池に蓮が生え、一つの茎に二つの花が咲いたと記される。楊梅宮南池は現在特別名勝となっている東院庭園のことであり、復元整備している遺構もこの時期のものである。池底から岸にかけて礫敷であり、復元された反り橋の東側の池拡張部のみ礫敷ではなかったため、ここに双頭蓮が生えていたと考えられる。復元整備では薄い盛土にせざるを得ず、根の浅い水生植物を植えているのであるが、催事「東院庭園庭の宴」での庭園および祥瑞に関する説明の中で、復元フォトモンタージュを用いて当時の状況を示した（図6）。

令和元年は今上天皇即位の年であることから即位関連遺構に着目しその活用を図った<sup>14)</sup>。

東区朝堂院朝庭部には光仁天皇の大嘗宮に比定される遺構の平面表示が既になされているが、埋没や芝の被覆により不明確になっており、文化庁による



図5 年号のキャラクター



図6 楊梅宮南池の祥瑞（フォトモンタージュ）

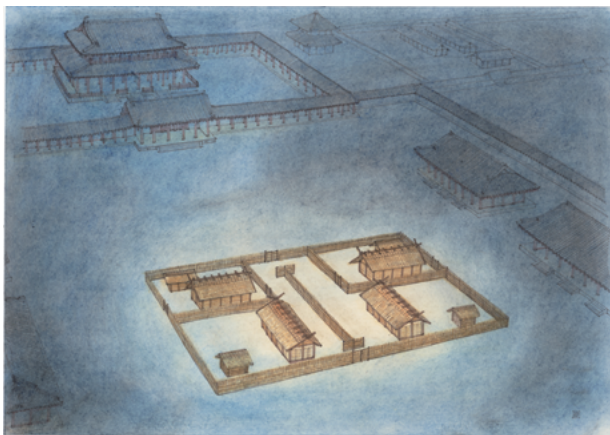


図7 大嘗宮リーフレットのイラスト



図8 AR宝幢・四神旗

清掃工事とも時期を調整し、遺構説明リーフレットを作成し、大嘗祭が行われた夜間の大嘗宮の様子をイラストで再現した（図7）。

即位式や元日朝賀の時には大極殿の南に宝幢・四神旗が七本建てられたと考えられている。復元された第一次大極殿に伴う遺構は近年になって認識されたもので現在は未整備である。このため、既に製作していた1/3模型をベースにAR（拡張現実）での再現を行い、体験会でデジタルコンテンツの公開を行った（図8）。

#### （4）古代玩具を用いた遊戯の再生

平城宮や平城京の跡、秋田城跡、斎宮跡等から出土した土器皿の底面や裏面に韓国のユンノリという双六の盤面に似た図柄が見つかっており、それは「<sup>かりうち</sup>栲蒲」と呼ばれる日本古代の双六に似た盤面玩具であることが小田裕樹氏<sup>15)</sup>の研究で明らかとなった。『万葉集』には「かり」と呼ばれる4本の棒とその組み合わせを意味する言葉遊びが残されており、ルールを示唆する。奈良文化財研究所内に（仮称）日本かりうち協会を立ち上げ、コマや盤面、ルールなどの開発を行っており、当時の役人たちが禁止されても夢中でやったゲームの再生を図っており、復元建物内での活用を計画しているところである。

#### （5）古代食の再現

奈良文化財研究所では展覧会の度に古代料理の復元展示を行ってきた。近年はそれを再構成して再現したものを活用している。詳しくは本書高橋氏報告を参照されたい。

### 6. おわりに

以上、平城宮跡での古代の再現行事や、遺跡の本来的な性格に因んだ行事、新たに創造する催事、遺跡の理解に有効な展示・体験事業においてどのように歴史的脈絡に因んだ活用をするかについて記した。歴史的脈絡の利用によって、遺跡での復元行事や展示・体験事業の内容が充実し、遺跡の理解が深まるとともに、結果として地域の振興や観光利用に繋がれば良いと思う。



さて、個人的に意識してきた、韓国ソウルの宮殿での再現については、大韓民国政府の文化スポーツ観光部から韓国文化財財団に国庫補助金を支出し事業を行わせている。日韓共催のサッカーワールドカップの行われた2002年からは観光資源化を意識した大規模な再現事業が行われている。2003年の英祖50歳の御礼宴の再現は実際には500人以上の規模であったが約半数の出演、それでも230人とし、約3000万円規模の事業費である。詳細は本書安氏報告を参照されたい。文化財を活かすにはそれなりの予算も体制も必要である。

平城遷都1300年祭以後は、奈良県・奈良市を中心とした平城京天平祭の中で衛士隊や射礼等で再現が行われてきているが、国の特別史跡、国営の公園としても更なる充実を願うところである。

#### 【補註および参考文献】

- 1) 拙稿 2018「奈良文化財研究所による特別名勝平城宮東院庭園の活用について」『史跡等を活かした地域づくり・観光振興』平成29年度遺跡整備・活用研究集会報告書 奈良文化財研究所 pp.177-180
- 2) 高橋知奈津・内田和伸 2020「遺跡現地の活用の促進—平城宮跡の活用に関する実践的研究」『奈良文化財研究所紀要2020』奈良文化財研究所 pp.34-35
- 3) 拙稿 2006「ソウル景福宮での守門将交代儀式について」『遺跡学研究』第3号 日本遺跡学会 pp.158-159
- 4) 安泰旭 2008「朝鮮時代の宮中儀礼の復元、再現の現況と課題」『宮中儀礼の再現・復興による文化遺産の活用』埋蔵文化財ニュース130 奈良文化財研究所 pp.1-21、金英淑 2008「朝鮮王朝宮中呈才の復元、再現の現況と課題」『宮中儀礼の再現・復興による文化遺産の活用』埋蔵文化財ニュース130 奈良文化財研究所 pp.22-33
- 5) 濱崎加奈子 2020「伝統文化プロデュースの現場から」『中世に架ける橋』森話社 pp.341-356
- 6) 阿部健太郎・内田和伸 2004「射礼の復原に関する基礎的研究」『遺跡学研究』第1号 日本遺跡学会 pp.7-24
- 7) 立石堅志 2011「平城遷都千三百年祭「古代行事の再現」」『姿』3号 小笠原流・小笠原教場 pp.10-11、立石堅志 2011「序論」「古代行事を再現する」『平城遷都1300年祭—古代行事の再現—の記録』社団法人平城遷都1300年記念事業協会 pp.11-39
- 8) 前掲書6)
- 9) 芳之内圭・内田和伸 2006「五月五日節会の復興に関する研究」『遺跡学研究』第3号 日本遺跡学会 pp.103-114
- 10) 吉川真司 2011『聖武天皇と仏都平城京』天皇の歴史02 講談社 pp.237-242
- 11) 山本崇 2004「御齋会とその舗設—大極殿院仏事考」『奈良文化財研究所紀要2004』奈良文化財研究所 pp.34-37
- 12) 拙稿 2008「平城宮の復元と年中行事の復興について—古代の思想と整備活用のあり方—」『宮中儀礼の再現・復興による文化遺産の活用』埋蔵文化財ニュース130 奈良文化財研究所 pp.34-39、拙著 2011『平城宮大極殿院の設計思想』吉川弘文館 p.308
- 13) 拙稿 2008「平城宮復元とマスコットキャラクター」『遺跡学研究』第5号 日本遺跡学会 pp.208-209
- 14) 前掲書2)
- 15) 小田裕樹 2016「盤上遊戯「樗蒲（かりうち）」の基礎的研究」『考古学研究』63（1）考古学研究会 pp.63-84



